

けやき倶楽部 2017 年度第一回講演会報告

日 時	2017 年 5 月 16 日 (火) 13 : 00~16 : 30
場 所	千葉大学人文社会科学系研究棟 2 階 マルチメディア会議室
参加者	<p>けやき倶楽部会員 78 名 うち歴史グループ会員 38 名</p> <p>会員外 (千田講師友人) 1 名</p> <p>学生 9 名</p> <p>合計参加人員 88 名</p>
活 動 内 容 学 習 内 容 主 な 話 題 等	<p>千葉大学、歴史グループとの共催による2017年度第1回講演会開催。マルチメディア会議室満席の下、青木会長の開会挨拶、森本副会長の講演会にいたる経緯紹介、さらに千葉大学山田理事にもご挨拶いただき講演にうつる。</p> <p>1. テーマ : 「倭国の時代 (卑弥呼からワカタケル大王へ)」</p> <p>2. 講師 : 千田稔氏 (奈良県立図書情報館長、国際日本文化研究センター及び総合研大学院大学名誉教授) : 山田俊輔氏 (千葉大学文学部准教授)</p> <p>3. 講演内容</p> <p>(1) 「邪馬台国の成立とヤマト王権」 千田 稔先生</p> <p>「兵主の神 (アメノヒボコ) は邪馬台国に関連するか」、「楽浪文化の影響」をキーワードに、まづ寺沢説により邪馬台国=ヤマト王権成立説の紹介。古墳時代の始まりは纏向型前方後円墳の出現とそれを生む新しい時代・社会の成立にある。そして纏向型前方後円墳の源流となるのが吉備の楯築噴丘籙であり、その木槨が楽浪郡と関係があること、さらに漢鏡に関する研究からも楽浪文化の影響が明らかであると説明された。</p> <p>次に、邪馬台国論をモノの内外の移動だけで議論して良いのかと、ヒト内外の移動についてアメノヒボコ伝承から言及。『日本書紀』、『古事記』、風土記や各地の言い伝えの記述から、アメノヒボコは兵主の神であること。そして『播磨国風土記』のアシハラノシコオとアメノヒボコとの国占め争いや播磨の在来神との戦いからは、倭国大乱や在地神の後退を推測している。三輪山のある大国主命の地元纏向でも在地神の後退が進み、アメノヒボコ集団の助成により纏向がヤマト王権の都となったのではないかとキーワードであるアメノヒボコと邪馬台国の関連について述べられている。</p> <p>(2) 「雄略朝期の王権と地域」 山田俊輔先生</p> <p>5世紀、倭の五王たちは宋への朝貢を40年間に八度も行うなど、宋王朝や朝鮮半島諸国との交流が活発化し、新しい知識や生産技術を取り入れていく大変動の時代を迎えていた。国内の政治体制は、大王とその他の豪族の格差がそれほどなく、大王は地域首長から外交・軍事権の委任を受けた代表者に過ぎなさいと考えられていた。その論拠は、倭珍が朝貢し、自らの官爵の除正を求めると共に倭隋らの除正を要請したが、称号には大きな序列関係はなく、倭王とその臣下に隔絶した身分差がなかったからである。大王権の継承についても、複数の血縁集団に有力豪族がからみきわめて不安定であった。</p> <p>このような時代に表れた雄略は、朝鮮半島で人員、技術を囲い込み、畿内の南郷遺跡で実績をあげていた葛城や吉備の勢威を削ぐだけでなく、百済との関係をベースに葛城、吉備などを除いた外交の一元化、東北のフロンティア開発、地方の秩序だった集団による開発、さらに天下的世界を構想させる「治天下大王」の称号を生みださせた。</p>

4. まとめ

講演のテーマが、「邪馬台国の成立とヤマト王権」、「倭五王の時代」と、2世紀から5世紀の古代日本を連続的に網羅したものであり、また講師が、歴史について長年の研究経験と広範囲な知識をお持ちの千田先生、日本の古墳研究の第一人者である山田先生と、日本の始まり知るにはこれほど適切なものはないと考えられる講演会であった。また講演後の質疑のたび重なる応酬からみても、歴史に興味をもつ者にとって、もっと知りたくなるような、知的好奇心を刺激する講演会でもあった。

マルチメディア会議室満席の下、先生方の熱のこもった講演、講演後の質疑の応酬、千葉大生の聴講など、盛況な会場での内容の充実した講演会が開催でき、この講演会のトリガーとなった森本副会長をはじめけやき倶楽部関係者に感謝申し上げたい。

以上

文責 歴史グループ

竹田勇吉